

主 題：自由人として生きる 6

聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 5章24-26節

私は余り電車に乗ることはないのですが、たまに乗ると日本語以外の表記を目にしたリアナウンスを耳にします。それが非常に目立つようになった気がします。恐らく、皆さんの方がそのことはもっとご存じのことでしょう。この間、テレビのニュースで「〇〇人がこんなことをした」と言って紹介していました。なるほど、文化や習慣が違うとこんなにも違うものかと楽しく見ていましたが、それを見ながら思ったことですが、人は自分と違う人たちを見ると必ず観察するものだということです。私たちイエス・キリストを信じる者たち、私たちも実は観察されています。あなたの言動が見られています。この人たちはイエス・キリストを信じていると言うけれど、いったい、どんな人たちなのだろう？と。

これまで私たちはガラテヤ書から、イエス・キリストを信じた私たちひとり一人のうちに始まった神の救いのみわざについて学んで来ました。罪の赦しをいただきました。その時から、イエス・キリストに似た者へと変えられて行く「聖化」という救いのプロセスが始まりました。聖霊は私たちを日々イエス・キリストに似た者に変えて行くという、私たち人間にとって信じられない人生がスタートしたのです。このクリスチャンとしての生活はこのように言えないでしょうか？私たちの救い主を世に明示する人生であると。私たちの人生は私たち自身を人々に誇る人生ではありません。私たちの人生は私たちの主を人々の前に明らかにする人生です。

しかし、悲しいことに、そのような願いを私たちは持っているが、私たちの心の中には葛藤があります。確かに、神に喜ばれる歩みをして神のすばらしさを現わしていきたいという思いと、自分の好きなように生きて自分を楽ませることができたらそれでいいとするこれまでの思いと、その二つの性質が私たちのうちにあることを知っています。また、この二つの性質が存在しているだけでなく、それぞれがそれぞれの心を支配しないようにと邪魔し合っているのです。パウロが自分の信仰生活についてこんなことを言っています。ローマ7：15、19「15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」「19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。」と。まさに、これは私たちの悩みではありませんか？神に喜ばれることをしていきたいとどんなに強く願っても、残念ながら、私たちにはそれとは全く違う思いがあって、心の中でいつも戦っているのです。

前回、私たちはこのガラテヤ人への手紙の中で、肉によって支配された人の歩みと、聖霊、御霊によって支配された人の歩みをパウロが比較しているところを見ました。この19-21節に出て来る15個の汚れた一つ一つの行いを見たときに、まさに、これは肉が支配した人の姿です。そして、私たちは救いに与る前はこのような生きていたのです。また、22-23節には、新しい性質が支配した人の特徴、御霊の実が実っている人の状態が記されていました。恐らく、パウロはこの二つを対比することによって、クリスチャンたちが肉に支配され続けることを憎み、却って、御霊に満たされ続けていきたい、御霊に支配されていきたいという確固たる思いをより強固にすることを願っていたはずで

パウロは、これまでの生き方がどれ程汚れたものであり、無価値なものであるかを見せることによって、イエスを信じることによって始まった新しい生活がどんなにすばらしいのか、益々それを求めていきたい、そのように歩んでいきたいという思いを讀者たちがしっかりと持つようにと、そのことを願っていたことは言うまでもありません。ただ、どうでしょう？皆さん。これまでの生活を振り返ってみて、イエスを信じて救いに与った私たちはみな、神が喜ばれるように生きていきたいと強く願っています。しかし、悲しいことに、そのような歩みができていないのが現実ではありませんか？神が喜ばれる歩みを為していくことは大変難しいことだと。そのことは皆さんは日々の生活で経験しておられることでしょう。

実は、この5章の最後でパウロは、私たちの葛藤、私たちの弱さを知った上で、願っていることがなかなかできない私たちの弱さを知った上で、では、どのように生きるべきかを教えてくれるのです。どうすれば私たちは、このような罪が私たちを支配し、かつてのような罪に汚れた虚しい生き方をしないですむのか？どうすればそういう生き方に勝利して神が喜ばれる歩みを為していけるのか？そのことを教えてくれるのです。それは私たちにとって非常に大切なことです。なぜなら、私たちが教えられたように生きることによって、確実に、私たちのことを見ている人たちに私たちは正しいメッセージを伝えることができるからです。その秘訣を今からごいっしょに見ていきましょう。

パウロは5：24-26で二つのことを教えています。

A. 肉を殺しながら生きる 24節

24節「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」、まず、「キリスト・イエスにつく者は、」とあります。パウロはこういう表現を使って、救いに与ったクリスチャンたちのことを表しています。このことばはガラテヤ3：27でもパウロが使っていた表現です。「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」と。キリストに属する者、それがクリスチャンです。そして、どうすればキリストに属することができるかと言うと、ここにあるように、聖霊のバプテスマを受けることによってです。

こうしてパウロは、私たちクリスチャンとはどういう者かを教えるのですが、ガラテヤ人への手紙の他にもパウロは別の表現をもって私たちクリスチャンのことを表しています。たとえば、私たちは神と特別な関係に入れられた者であると言います。「神を知り、神によって知られている」関係です。もちろん、キリストにつく者、キリストに属する者、そのこと自体が特別な関係ですが、コリント人への手紙の中でパウロがこのように言っている箇所があります。Iコリント3：23「そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです。」と。ここにも私たちクリスチャンと神との特別な関係が描かれています。「キリストのものであり、」ということばです。キリストとクリスチャンとの関係をパウロはキリストと父なる神との関係と対比して説明しています。「キリストは神のものです。」、つまり、イエス・キリストと父なる神が特別な関係にあるように、救いに与ったあなたは神との特別な関係に入れられたということです。

「救い」ということを考えたとき、すでに、何度も学んで来ましたが、神はあなたに罪の赦しをくださった、神は主イエス・キリストの義、正しさをあなたに転嫁してくださった。そのことによってあなたは神の子どもとされ、この地上にあって神と親しく交わることができ、そして、この地上での生活が終わった後も永遠に神とともに過ごすという、そのような祝福に与る者へと神はしてくださったのです。特別な存在です。これは救いに与ったあなたのことを言っているのです。全知全能の神、唯一真の神とあなたは特別な関係にあるのです。だから、あなたはいつもこの方の前に出て行くことができるし、いつもこの方に祈りを賛美をささげることができます。この方は常にあなたとともにいてくださるのです。確かに、特別な関係に私たちを招いてくださったのです。

もう一つの表現は、ガラテヤ4：9に記されています。「ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、…」と、ここに「知る」ということばがあります。私たちが何度も学んでいるように、ここで使われている「知る」ということばのギリシャ語はただ知識をもっているということではなく「個人的に知っている」ということです。個人的な関係があるということですから、私たちは個人的に神のことを知っているし、神もあなたのことを個人的に知っているのです。このような特別な関係に私たちを入れてくださったのです。

思い出しませんか？神のさばきのときに自分は救われていると思っていた人が神の前に立って自分の弁護をすることが書かれています。マタイ7：22「22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』」と、つまり、こういう行いをするによって救われると彼らは思っていたのです。だから、彼らは「私たちはこんなにもいいことをして来たではないですか！だから、救われているでしょう？」と訴えるのです。そのとき、主が何と言われるか？23節「しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。…』」と。「わたしはあなたと個人的な関係にない。わたしは個人的にあなたのことを知らない。」と言われたのです。つまり、親しい特別な関係に入っていないということです。「全然知らない」という副詞が使われていますが、これは「一度もない、決してない」、英語では never と訳されることばが使われています。これまで一度もあなたとわたしが個人的な関係になったことはない。

でも、ガラテヤ4：9では「あなたは神のことを個人的に知っているし、神もあなたのことを個人的に知っておられる」とあって、このような関係に私たちクリスチャンは入れられたのです。これがクリスチャンだと言うのです。

さて、今日のテキストを見て、「キリストにつく者」と語った後で、今度はパウロは「救われた者たちとはどういう者たちなのか」ということを読者たちに思い起こさせようとしています。24節を続けて見てください。「…自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」とあります。つまり、パウロは「クリスチャンとはイエス・キリストとともにすでに死んだ者だ」と言っているのです。「十字架につけてしまったのです。」と書かれています。この動詞をパウロは不定過去という時制を使って表しています。いつかは定かではないけれど、確実に過去において起こった出来事です。ですから、あの十字架を見るときに、まさに、そこに私たち信仰者もともに十字架に架けられたのだとパウロは言うのです。ガラテヤ2：20には「私はキリストとともに十字架につけられました。…」とあります。そして、

5章でもパウロは同じ表現を使っています。

ですから、私たちが覚えておくことは、救いというのは神に逆らって来たかつての自分の死を意味するということです。恐らく、パウロがイエス・キリストの十字架を思い起こすときに、何を見たのかというと、すべての創造主である神がこんなにも私を愛してくださった、こんな罪深い私をその罪から救い出すためにご自分のいのちを捨ててくださったという、その恵み、その愛です。しかし、それだけではなかった。十字架上のイエスとともに自分がそこに架かっている姿を見たのです。神に逆らっていたかつての自分はあのイエス・キリストとともに十字架上で死んだのだと。そのことを彼はいつも思い起こしていたのです。ということは、これまでの私たちの生き方も、私たちの古い生活も、あの死で終わったということです。私たちが覚えなければいけないことはそのことです。

イエス・キリストの救いをいただいたということは、罪の赦しをいただいただけでなく、かつての自分は死んだということです。ローマ6：1からパウロは繰り返してそのことを私たちに教えようとしています。2節には「…罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」とあります。4節には「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。」、5節にも「キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、」、6節には「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」、7節には「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」と書かれています。

皆さん、救いに与るということ、罪の赦しをいただいたということ、新しく生まれ変わったということ、これは同時に、かつての自分は死んだということです。なぜ、それが大切か？かつての自分が死んだから新しい生活ができるのです。これまでの私たちは神に喜ばれる生き方はできなかったのです。なぜなら、罪の奴隷であって罪に束縛されていたから、自由がなかったのです。ところが、救いに与ったことによって、かつての自分が死んだことによって、私たちは新しい歩みが可能になったのです。これが救いなのです。この救いによって、自らの意志で主に仕えるという自由人としての新しい人生が始まったのです。だから、パウロは繰り返して、自由人はどのように生きるのかを教えるのです。なぜなら、それが可能になったからです。かつての自分は死んだのです。そして、新しく私たちは主によっていのちをいただいたのです。そのことはこの後見ていきます。

24節を見ると、確かに、自分の肉を十字架につけてしまったと書かれています。それだけではないです。「さまざまの情欲や欲望とともに、」ということばが加えられています。二つの名詞があります。

- ・情欲： 強い肉体の願望、特に、性的なものを意味します。
- ・欲望： だれかの持ち物を自分のものにしたいという欲望です。また、このことばは道徳的に正しくない行動に係わることです。たとい、それが道から外れていても私の欲しいものを私は手にしたいという欲望です。また、辞書によれば「悪い性的な願望」という意味もあると定義します。

使徒の働き20：33には「私は、人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。」とあり、「むさぼる」という意味もこのことばにはあるのです。同時に、性的な問題も含まれています。ここには若い人たちもたくさんいますから、皆さんがしっかり覚えておかなければいけないことは、今のこの世はそれぞれが好きのように生きていいと言います。フリーセックスの時代に生きているのだから何をしても構わないと。でも、よく考えるなら、特に、女性の方々、あなたの友達があなたのからだを求めて来たとするなら、その人はあなたのことを愛していません。何をしているのか？自分の欲望を満たすことしか考えていないのです。「愛する」とは相手を大切にすることです。その人が傷つくことを極力避けるのです。でも、そうしてそれが愛であるかのように誤解させてしまいます。男性はそのことをしっかり覚えて女性たちを守らなければいけないし、女性たちもよく気を付けて愛ということばに騙されてはいけないのです。聖さを保つことは正しいことです。神が喜ばれることです。Iペテロ1：14にも「従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、」と書かれています。ここに記されているこの罪を見たときに、まさに、これらは利己的なものです。自分さえ良ければいい、自分の欲さえ満たされたいのです。

パウロは「…自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」と言いました。それらを「殺した」ということです。このことを理解するために皆さんに十字架を思い起こしていただきたいのですが、十字架には犯罪人が付けられます。そのときには、その犯罪人たちの死を見届ける人たちがいたのです。それは兵士たちです。なぜ、そうしたのか？それは犯罪人たちが確実にだれかに盗まれたりしないために、そこで完全に息を引き取るまで見張りをするのです。パウロがここで教えようとしていることは、自分の情欲や欲望を十字架に付けた、つまり、それらが確実に死ぬまで十字架に付けて置きなさいということです。それらはまた機会を探して出て来ます。十字架から降りて来ようとするのです。だから、あなたがたはそれらをずっと十字架に磔にして置きなさいと、そのことをパウロは

この24節で教えようとしたのです。

このことはすでに見て来たように、罪の誘惑は来ます。そのときに私たちはそれをすぐにストップさせます。それが私たちを支配することを許さないのです。異なった表現でパウロは同じことを言うのです。それは「死に値するものだ。そこには何の良いものもない。」と。だから、それらを十字架にずっと架けて完全に息を引き取るまで見ていなさい、そこから降ろしてはいけないと言います。

イギリスの著名なクリスチャンだったジョン・ストットという先生は、19世紀のスコットランドの神学者であるジョン・ブラウンのことばを引用して、この箇所の説明をこのように記しています。「十字架刑は死を突然にではなく徐々に引き起こした。真のキリスト者はこの地上にいる間は、肉を完全に殺すことに成功しない。しかし、彼らは十字架にそれを固定したのであり、それが息絶えるまでそのままにしておく決意をしているのである。」と、今見て来たように、私たちにとって必要なことは、私たちを罪の生活へと導いていこうとするこの罪を十字架にしっかり磔にして、自由を与えてはならない。まさに、十字架に架かった者が徐々に息絶えて行くように、私たちもその罪が息絶えて行くのをしっかり見ていなさい、そこから降ろしてはいけないということです。

私たちの肉を十字架に磔にして肉を殺しながら生きるということを最初に見ましたが、パウロはコロサイ人への手紙でもこのように教えています。3：5「ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」と。同じことば「殺す」が使われています。ここで使われているこのことばは「処刑する、活力を失わせる」という意味です。パウロは様々なところに手紙を送っているのですが、教えていることはみな同じです。ガラテヤでもコロサイでもそうだったのです。私たちに必要なことは、私たちが神に喜ばれる歩みをしていきたいという正しい願い、歩みを邪魔する十字架に磔にした罪をずっとそこに架かっているようにするという事です。活力を失わせるように、罪を野放しにしないでそれをしっかり支配し続けて行くようにと教えるのです。

ですから、24節では、罪は必ず私たちを誘惑して私たちの心を支配しようとするから、それを許してはならないと教えるのです。

B. 御霊の力によって生きる 25節

二番目に教えるのは25節「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」、パウロは聖霊がどんな働きをするのかを教えています。

1. いのちを与える御霊

「もし私たちが御霊によって生きるのなら、」とあります。私たちはかつて死んでいたものですが、信仰によって生きるものへと変えられたのです。思い出してください。イエスがニコデモと話していた時「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」(ヨハネ3：3)と言われました。ニコデモは何のことがよく分からなかった。どうしてこんな大人が母の胎に入ることができるのか？と。肉体的な「新生」を考えたのです。ところが、イエスは霊的なことを言われたのです。私たちは永遠に生きるためにはいのちが要ります。この地上にあって神のみこころに従って行くためにはいのちが要るのです。

だから、同じ時にイエスはこのように言われました。ヨハネ3：5「イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。」と。これは「救い」のことです。永遠のいのちをいただくためには「救い」が要るのです。新しい歩みをしていくためには「救い」が要るのです。では、どうすればその「救い」を得ることができるのか？「水と御霊によって」とあります。「水」とは「きよめ」を象徴的に表現しています。H2Oのことではありません。水はきよめるために用いられていたのです。ですから、あなたがたはきよめられて、罪のきよめをいただいて救いをいただく、その働きは聖霊なる神によって成されるのです。聖霊なる神が罪人のうちに働き、その人の罪をきよめてくださり救いへと導いてくださるのです。ガラテヤ6：8に「自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」と書かれているとおりで。

ですから、クリスチャンの皆さん、あなたがこの救いに与ったのは、聖霊なる神があなたのうちに働いてくださっていのちを与えてくださったからです。

2. 新しい生活を与える御霊

「御霊に導かれて、進もうではありませんか。」と、聖霊なる神は「いのち」を与えるだけではない、新しい生活を与えてくださる。新しい生活を行わせてくださるということです。ここに「御霊に導かれて、」とあります。5：18を見てください。「しかし、御霊によって導かれるなら、…」とあります。どちらも「御霊」、聖霊によって導かれることを言っていますが、どこが違うのかというと、18節の「導かれる」という動詞は受動態です。つまり、神があなたを導いてくださるということです。感謝なことに、私たち

信仰者は私たちを救ってくださった神が私たちを導いてくださるのです。あなたが神にその働きを求めらるなら、神がちゃんとあなたを導いていってください。神はみこころのままにあなたを様々な働きに用いてくださるのです。もしかすると、この中から宣教師として世界に送られるかもしれません。不思議な方法で神は働きます。でも、確実なことは、神は求める者たちを導いていかれるのです。ですから、18節ではその働きを受け身で書いています。

ところが、25節の「導かれる」は能動態で書かれています。「御霊に導かれて、進もうではありませんか。」と。パウロが教えていることは、確かに、導きを与えてくださるのは聖霊なる神ですが、同時に、クリスチャンである私たちには責任があるということです。あなたに責任があるのです。なぜなら、実際に歩みを為すのはあなただからです。みことばには「このように歩んでいきなさい」という教えはたくさんあります。たとえば、「心の一新によって自分を変えなさい。」とパウロはローマ12:2に記しています。ヤコブは「また、みことばを実行する人になりなさい。」(ヤコブ1:22)と教えています。その神のみこころに従って行くのはあなたの責任だからです。確かに、聖霊が私たちを導くのですが、その導きに応じて従って行くのはあなたの責任だからです。その二つのことを教えるのです。神が導いてくださるけれど、導かれる私たちは「神さま、そのように私は歩んで生きたい！」と願って従って行くことが必要だということです。

ですから、25節で使われている「導かれる」ということばは「列を作って歩く、〇〇を規範として生きて行く」という意味です。つまり、主の導きに忠実に従って行くこと、信仰の勇者たちが生きたように、それに倣って生きて行くことです。パウロは面白いことを言っています。Iコリント11:1「私がキリストを見なられているように、あなたがたも私を見ならってください。」と。パウロはイエス・キリストがどのように歩まれたのかを見てそれを模範にして来たと、そして、「私がそのように歩んだようにあなたがたも歩んでいきなさい。」と言うのです。神の導きに応じて行くこと、従って行くこと、その責任をこの25節は私たちに問うているのです。

ですから、私たちはこのように礼拝でみことばを聞いて神のみこころが示されますが、そこにはあなたの神に対する責任が明確にされているのです。「これがわたしのみこころだ。これに従いなさい。」と言われる神に対して、それに従って行くのかどうか？それは聞いたひとり一人の責任です。そのことをこの25節は私たちに明らかにしています。

*御霊に導かれるには…

簡単に三つのことを言いますから、ぜひ、覚えてください。

1) 御霊の支配を常に求めること

神に導いていただくためには神に支配していただかなければどのようにしてその導きに従っていけるでしょうか。「…御霊に満たされなさい。」とパウロはエペソ5:18で教えました。継続して常に御霊に支配していただきなさいと言います。ですから、あなたが聖霊なる神に従っていきたくて思っているなら、まず、あなたを導いてくださる聖霊にあなた自身のすべてを支配していただくことを求めるのです。

2) 聖書のみことばを心に蓄えること

神のみこころに従っていくためにはそのみこころを知らなければいけません。何をしてもいいのではない。確実に、神はどのように歩むべきかを教えてくださっています。ですから、みこころに従うためには神のおことばを心に蓄えることが必要です。聖書のみことばを心に蓄えることです。みことばを正しく理解してそれを心に蓄えることです。コロサイ3:16に「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」とパウロは教えています。あなたが手にしている聖書には神ご自身のみこころが書いてあるからです。私たちがどのように歩んでいくべきか、神は何を望んでおられるのか、そのことが記されているのです。ですから、私たちはこの聖書のみことばをしっかり蓄えることです。

3) 罪から離れること

5:17で見たように「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」と、あなたが神に従いたいと思っても、この肉が罪が邪魔するのです。罪があなたの中に働いてあなたが神に従っていかないように邪魔をします。だから、私たちはこの罪から離れること、離れ続けていくことです。

皆さん、サタンは偽りの父であり嘘つきのかしらであるとそうように聖書が教えています。ヨハネ8:44「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」、このようにサタンが最も長けているのは「だますこと」です。人々を惑わすことです。

その働きは確実に私たちの生活の中で為されています。たとえば、神のみこころに従っていきなさい

と神は言われます。でも、サタンは人間の知恵によって生きていったらどうですか？と言います。聖霊なる神は私たちに聖霊の助けをいただきながらその御力によって歩いていきなさいと言います。でも、サタンはいや、自分の力で頑張ってみたらどうですか？と言います。罪は必ず私たちを正しくない方向へ導こうとします。

5：19-21に記されていた15の罪を思い出してください。これらは「肉に従って歩む人の特徴」でした。最初の「不品行、汚れ、好色、」は性的な罪だと言いましたが、これは自分の欲望を満たしたいとする思いです。たとえ、それがどんな結果をもたらそうと、私のこの欲望を満たしたいと。次の「偶像礼拝、魔術」はどうですか？神よりも自分の愛するものを優先したいとする欲望です。「私は神よりもこれが大切だ…、こっちのほうが好きだから…」と。それが問題だということです。その後にくリスト、10個ありました。「敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ」、そして「酩酊、遊興」、これらはすべて自己中心、自己愛から来ています。そのことに気付かれますか？考えてみてください。私たちはどうして人を嫌いになるのでしょうか？経験あるでしょうか？その理由を考えると、「あの人は自分の好きなタイプではないから」とか「自分と性格が合わない、波長が合わないから」「自分の好みではないから」「自分が期待するようなことをしてくれない」「自分が望んでいるように自分を扱ってくれない」「自分を苦しめる」「自分の願いを聞いてくれない」などなど、結局、中心は自分です。すべての中心が自分なのです。何よりも自分を一番愛しているからです。罪はあなたの目をあなた自身に向けさせようとするのです。「私は可哀そうだ、こんな扱いを受けているから…」「私はもっと幸せであるはずなのに、こんな惨めな状態にいるのは周りの人たちのせいだ。」と。自分の目を自分に向けてることによって、自分が被害者になることによって人々を責めるのです。ここに出て来たリストはまさにそういうものです。

だから、私たちはこの肉が私たちを支配することを許してはならないのです。私たちの目を自分に向けさせようとするこの誘惑を許してはいけません。私たちが見るべきは神です。みことばが教えてくれたように、私たちが愛するのは神であって、そして、私たちは自分ではなく隣人を愛するのです。ローマ6：12に「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。」とあるとおりです。

確かに、このように聞いても「言っていることは分かるけれど実践は難しい」とすぐに思ってしまいます。神のハードルは高すぎて私はそれを越えることはできないと言います。私たちが覚えるべきことは、「こうしなさい」という神の教えに対してそれを履行するには神の助けが不可欠だということです。これがなければ絶対に無理です。見たように、サタン、罪は私たちにどのように働くのか？「大丈夫、あなたはできるから、こうして生きて来てください。だから、信仰生活も同じように頑張ってみなさい。」と言います。そのような歩みをするとき、私たちは自分自身は信仰的に余りにも弱い者だということで、落ち込んでしまうのです。落ち込んだ信仰者が多いのです。

この間、アトランタである人がこのような質問をしました。「なぜ、悩んでいるクリスチャンが多いのですか？なぜ、喜びをもって生きているクリスチャンが少ないのですか？」と。皆さんはどう答えますか？最後に、ピリピ2章を開けてください。ここに答えが書かれています。2：12-16「：12 そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」と、この「救いの達成に」とは信仰生活のことです。罪の赦し、救いのことではありません。救われた者がクリスチャンとして生きて行くこと、それを「救い」と呼ぶのです。罪からの救いだけでなく、信仰生活も救い、正確には「聖化」と言います。「：13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」と、今見て来たように、神はみことばを通してご自身のみこころを明らかに示してくださる。「このように生きなさい。これがわたしのみこころだ。」と教えてくれるのです。私たちは今日そのことを見て来ました。神が何を望んでおられるのか？つまり、神のみこころを見たのです。そして、神は「あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、」ます。つまり、このように生きていきたいという願いを神がくれるのです。その後、「事を行わせてくださるのです。」とあります。実践が難しいと言う私たちに対して神が「行わせてくださる。」のです。

神は私たちのうちに働いて「このように歩みなさい」と示し、私たちにそのように生きていきたいという願いをくださり、それを実践させてくださるのです。だから、「私たちは頑張ろう、意志を強くしましょう。」などと聖書は教えていないのです。できないからです。でも、できることがあります。「：14 すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。」と、神のことばを信じてそれに従いなさいと言います。15節から見てください。「：15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中であって傷のない神の子どもとなり、：16 いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間でためです。」と。神は私たちを使ってくれるのです。

最初にも見たように、私たちは私たちが救ってくれた神を人々に明示していく。どんなに素晴らしい神であるかを明らかにしていく。その働きを神はあなたを通して成してくださるといのが約束です。

確かに、みことばはそのことを記しています。「私は罪深いし弱いし愚かです。」、神はそんなことを知って、その上で「世の光として輝」かせてくださるのです。そのように用いてくださるのです。これが神の約束です。もし、あなたがそのように歩むなら16b節「そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることが出来ます。」、あなたがイエスの前に立ったときにこの約束を信じて「神さま、私のような者ですがどうぞみこころのままにお使ください。あなたのみこころにあなたの助けによって従っていけるのですから、どうか、そのように私を導いていってください。」とそのようにあなたが歩んでいるなら、イエスの前に立ってさばきを受けるときにあなたは「この人生は無駄でなかった」と心から言えるのです。

ですから、私たちは神が「こうしなさい」と命じられこと、神のみこころを知ったときにすぐに覚えるべきことは、「その履行のためには神の助けが絶対にいる」ということです。「神さま、あなたが言われることを実践したいですから、どうか、助けを与え続けてください。」と。罪が誘惑したときどうしますか？それにストップをかけて「神さま、どうか私の心をあなたが支配してくださるように」と助けを求めます。このように信仰生活は神の助けを求めながら、助けをいただきながら生きて行くのです。

恐らく、私たちがこの地上の生活において学び続けて行くことは、神の力がどんなに偉大であるかということです。私たちは神が全能であるということを知識としてもっています。神にはどんなこともできると知っています。でも、実生活にそれが生きていません。ですから、私たちは日々の生活を通して、「ほんとに神は全能だ！不可能と思えることもみこころならばしてください。すごい神なんだ！」ということを読み続けて行くのです。パウロはエペソの教会に対してそのことを祈っています。エペソ人への手紙1：19「また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知る事ができますように。」と。神の力が働いているのに、多くのクリスチャンはそのことを知らないと言うのです。そして、不完全な自分の力に頼ってできないことをしようとしているのです。私たちはどんなことでもできる神の力に頼って生きるのです。

***あなたはみことばを信じ、そのみことばに信頼を置いて歩んでいる信仰者でしょうか？**

もし、あなたが肉によって支配されているなら、悲しいことですが、次のような悲劇を招いてしまいます。26節を見てください。「互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることをないようにしましょう。」、この歩みの問題は「自分を中心に置いていること」です。肉の支配を許してしまっているのです。実は、この26節は原語では「虚栄に走ることをないようにしましょう。」ということばから始まっています。もっと正確に言うなら、26節の最初に出て来ることばは英語の「NOT」です。否定です。つまり、「これらのことをしてはならない」と禁止をしているのです。「虚栄に走ることを」、それをしてはならないということです。

・虚栄に走る：これは「うぬぼれること、見栄、自慢すること」で、「走る」とは「そのようになること、become」です。パウロが言いたいことは「虚栄をもって生きる人になってはならない」ということです。つまり、神の前に全く虚しいプライドをもって生きるような歩みをしてはならないと言うのです。ガラテヤ6：3、4でまさにそのことに触れます。「3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。4 おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。」、いったい自分の何を誇ろうとするのか？神の前ではすべて虚しいものだということです。

もし、私たちがこのような罪によって心を支配されているなら、このような悲しい問題が生じて来ます。それは、

・互いにいどみ合う：これは「争い」です。

・互いにそねみ合う：「ねたみ、憎しみ、嫉妬心」が出て来るということです。

もし、私たちが自分に目を向けて、くだらない人間的なことを誇っているなら、自慢し合っているなら、こんなことになってしまうということです。みことばは「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」(ペリピ2：3)と教えます。

さて、まとめです。肉に支配された人は問題を生み出す可能性があります。なぜなら、その人は自分に焦点を当てているからです。でも、御霊に支配されている人は神の栄光を現します。なぜなら、神に焦点が当てられているからです。あなたは自由人だと。罪の束縛から完全に解放されて選択ができるようになったのです。神に仕えるのか仕えないのか？従うのか従わないのか？その選択の自由があなたにあります。パウロはその上で言います。「神が喜ばれる選択をあなた自身の意志をもって行いなさい」と。神が喜ばれることは何かを考えてそれを選択しなさい、それが自由人とされたあなたの自由人としての生き方だと。

確かに、人々はあなたを見ている。でも、あなたがこのように歩むなら、確実に、あなたはすばらしい主を証する器として、神によって用いられ、神の証があなたを通して為されていきます。だから、

このように生きなさいと言うのです。

どうか、この一週間、そのように歩み続けて行きましょう。それは私たちが誉められるためではありません。私たちの神が人々の前に明らかにされるためです。

《考えましょう》

1. キリスト者が「肉の誘惑」に勝利することは可能でしょうか？
2. 勝利を得るためにはどうすれば良いとパウロは教えてくれましたか？
3. 「御霊に導かれて生きる」にはどうすれば良いのでしょうか？
4. 主が教えてくださったことを信仰の友と分かち合い、祈り合ってみことばの実践に励んでください。